

## 「古き良き時代」からの戯言

教育学部 加藤 一郎

昭和24年岐阜県に生まれましたが、父親の転勤で4歳から東京、ついで、15年ほど前から越谷市で暮らしています。大学では西洋史学科を、大学院では国際関係論課程を専攻し、おもに、東ヨーロッパ・ロシア世界のスラヴ民族史を研究してきましたが、今では、少々関心を移して、戦勝国＝連合国が作り上げてきた第二次世界大戦の「正史」（「東京裁判史観」、「ニュルンベルク裁判史観」）の「見直し」＝「修正」に取り組んでいます。（かとう・いちろう）

講義科目としては、共通教養の「歴史学」（受講者250名程度）、専修専門科目の「国際関係史」（40名程度）、「ヨーロッパ史学史」（40名程度）、西洋史（40名程度）、西洋史特殊講義（40名程度）、演習科目としては、「社会科演習Ⅰ、Ⅱ」（10名程度）その他などを担当しています。また、最近では、ゼミ生諸君とヨーロッパ、アジアの各地に出かけることも多くなりました。ここでは、共通教養の「歴史学」を例にとり、お話ししたいと思います。

### <古き良き時代>

私自身の大学生活は、大学・大学院を通じて、今では批判されることの多い「古き良き、いい加減な大学」のなかにどっぷりとつかってしまいました。入学しても、講義が始まるのは、だいたい5月の連休明けのことが多く、もちろん、「シラバス」とか「セメスター」というような最近流行の不可解な外来語も氾濫していませんでした。また、学生運動真っ盛りの時代であったためか、ほとんど授業にでたこともなく、「許してちょうだい、クラス討論、呼んでちょうだい、ゲバ（今では死語）、コンパ！」を個人的なスローガンにしていました。大学院時代も、毎週1回の指導教官のゼミに出席するだけで、あとは、近所の碁会所に通っていただけで、のちに自分自身が大学の教員となったとき、どのように「講義なるモノ」をしたらよいのか、ほとんどイメージがわかなかつたほどです。また、旧制高校時代の名残が残っていたためでしょうか、講義やゼミなどの大学「昼の部」以外の、大学「夜の部」では、先生方も、私たちの青臭い議論に寛容な態度でつきあってくだされ、その影響の中で、私自身の学問観・大学観が培われていったように思います。

そのような学問観・大学観の一つが、自分の研究が社会のために役に立つとか、あるいは、それを学生に伝えることに何らかの価値があるというような「啓蒙主義的」な態度をとってはならないというものでした。私の恩師は、「歴史学というものは一番役に立たない学問である」とおっしゃっていましたが、結局、私個人もその歴史学のなかでも一番マイナーな分野を選択してしまいました。この考え方を抽象的に言い換えれば、大学教育の目標は、広い意味での「教養」＝「人格」＝「品位」の修得であり、「実学」はこれを修得するための土台にすぎないということでしょうが、今では、このような考え方も、「古き良き時代」の遺物として批判の対象となっています。しかし、卒業後の社会でのポスト配分をめぐる選別競争が大学受験で基本的に終わってしまっている以上、とくに文科系の大学が学生諸君に対して与えることのできる「実利的なアメ」は、ほとんど存在しえないのではないかと、という「論理的アポリア」は解決されていません。

「古き良き時代」に培われた学問観・大学観の第二は、大学は基本的に教員と学生が自主的に研究・教育・勉学する場であり、教員

は学生に対して権威主義的に接するべきではないというものでした。私の恩師は、私が大学教員になるとき、「学生に酒をつがせるようになってはいけない」、「学内政治に関わってはいけない」という二つの戒めを「贈る言葉」としていただきました。このことを一般的に言えば、全体的な規制や枠組みが存在することはやむを得ないとしても、教員は単位や出席によって授業への参加を強制すべきではなく、学生は自主的な価値判断に基づいて、講義その他を聴講すべきであるというものでしょうが、今では、このような考え方も、大学の「レジャーランド」化を促進してきたとか、学生の甘えと教員の怠慢の相互依存の構造を生み出してきたと批判されています。しかし、ここでも、そもそも学生が大学に求めているもの＝大学に対する本音の社会的需要が、何となく学問的な色彩を帯びている「レジャーランド」＝「人生における4年間のモラトリアム」ではないのかという疑問が生じます。

### ＜講義スタンス＞

講義スタンスは、この「古き良き、いい加減な大学」のスタイルをそのまま踏襲しています。

第一に、基本的に出席はとったことがなく、「聞きたいものだけが、出ればよい」という姿勢をとっております。

このスタンスには、二つのメリットがあります。その第一は、受講者は基本的に、自発的に受講しているという前提が作られることになりますので、講義に退屈して私語にうつつをぬかすという問題は発生する余地がなくなります。その第二は、学生に受講を促す要因が、単位修得や出席という外的な強制ではなく、講義内容自体の魅力であり、その魅力が失われれば、受講者0という状態となりますので、私のような怠慢な教師にも、講義の内容を不断に魅力あるものにしなくてはならないという刺激(恐怖感)を与えてくれます。この意味で、学生にとって、科目選択の余地が比較的残されている共通教養科目は、教員

同士の「さわやかな」競争の場を提供しております。実際、私の「歴史学」は、本学の人気科目である人間科学部の丹治先生の「心理学」と同じ月曜の1時限目におかれていたもので、何年かにわたって、受講者数を競ってこの「心理学」に無謀にも挑戦してみたのですが、そのたびに、「無惨な敗退」を繰り返し、結局この時限を撤退するはめに陥ってしまいました。私の「敗因」は、この「文科大学の授業」シリーズの丹治論文を見れば一目瞭然です。

これとは逆に、「出席はとらない」という講義姿勢は、受講した学生に成績評価についての不満感を生み出すというデメリットも伴っています。まじめに出席することに受講の「アイデンティティ」を求めている学生も多く、また、テストの形式にもよりますが、抽象的な論述形式のテストを実施した場合、「あいつは一回も出席していないのにAで、なんで自分は全出席したのにCなのだ」という不満が当然生じるからです。授業アンケートをとっても、「出席をとってほしかった」という要望がかなりあります。また、当初から基礎修練的な性格を持たざるを得ない語学や実技実習の場合には、「出席」をとって、ある程度の基礎知識や訓練をたたき込まなくてはならないこともあると思います。

第二に、テスト＝成績評価に関しては、大学での試験は「無ければ物足りない刺身のつま」あるいは、「小学校の運動会での徒競走のリボン」という姿勢をとっています。とりわけ、共通教養科目に関しては、私の講義に共感するにせよ、批判的であるにせよ、内容自体＝話の流れを理解しているかどうか、あるいは、講義テーマに関して自主的な勉強をしているかどうかを評価の基準としています。人間科学部の市川先生が、「大学の教員は、学生生活のたんなる一つの風景にすぎない」というようなことをどこかで書かれていましたが、これにならえば、「大学の試験も、講義の風景、学生生活のたんなる一つの風景にすぎない」というところでしょうか。

## <講義スタイル>

多人数相手の共通教養科目の場合、スライドやプリントなどの補助教材を使うことは、設備の面でも、また、コストの面でも容易ではありません。私としてもプリントなどを配れば、話も進めやすく、受講者にも便利であると思っていますが、どういう訳か、コスト意識の方が先に立ってしまいます。結局、話術だけが頼りになります。「話術1本30年」とうそぶいているわけですが、漫談をやっているわけではないのですから、以下の点に気をつけながら話を進めています。

①一般常識に反するいわば「暴論」、「極論」から話を始めること。

本学の学生気質は一般に「生真面目」とか「純朴」といわれていますが、それは、ある意味では、世間の一般常識、固定観念、価値観に囚われていることを意味してもいます。ですから、そのような一般常識を破壊するような「暴論」、「極論」を最初に提示することで、学生諸君の関心を引きつけることにします。例えば、共通教養の「歴史学」では大東亜戦争をテーマとしていますが、「戦争にも積極的な意味がある」、「戦争は人間的な崇高さの発露である」というような話から始めれば、「戦争は悪いものだ」、「戦争は非人間的な行為である」というような「戦後民主主義的」固定観念のなかで20年間育ててきた学生諸君は、「こいつ何を言ってるんだ」という反発を感じつつも、聞き耳を立ててくれることになります。そのあとで、ある意味では退屈な基礎知識を講義すればよいのです。授業アンケートにも、「先生の講義を聴いて、目からうろこが落ちたような気がしました」というのがありますが、そこまでくれば教師冥利に尽きます(一方では、「加藤先生は洗脳がうまい」という批判もあります)。

②講義テーマ以外でも、「暴論」、「極論」をまじえること。

90分間の長い講義を1年間もやるわけですから、講義テーマだけで、学生諸君の関心を引きつけることは容易ではありません。ですから、ときに、講義以外のテーマ、とくに、

今話題となっているようなテーマを取り上げて、「暴論」、「極論」を展開します。例えば、サッカーの世界カップが話題となれば、「岡田監督は、次の試合の戦術について記者に質問されたなら、『フジヤマ・フォーメーション』、『カミカゼ・アタック』、『ゲイシャ・ディフェンス』を使う、と答えるべきである」と述べて、国際社会のなかの日本のイメージとその対外戦略の話につなげていきます。

③「話術」を工夫すること。

多人数相手の共通教養は、演説＝パフォーマンスに近いものがありますので、例えは悪いのですが、ヒトラーが鏡に向かって演説の練習をしたように、教員も「話し方」の技術を意識しながら、講義を進める必要があると思っています。どんなにすばらしい講義内容でも、「話術」の工夫がなければ、学生諸君の関心を引きながら、その内容を適確に伝えることはできないと思われるからです。よく「10年も同じ講義ノートを使って、毎年同じ内容の講義をしている」と「古き良き、いい加減な時代」の大学教員を批判することがありますが、「話術」という観点からすると、逆説的なのですが、同じ講義をしていた方が、「話術」自体は進歩していくということがあり得ます。私自身の個人的な経験からすると、旧ソ連時代の大学では、10年1日のごとく、政府公認の解釈にしたがった「ソ連共産党史」を講義する大学教員がいましたが、この先生は、ノートなどを使うことなく、それこそ朗々と講義をしており、その講義内容は学問的には噴飯ものであるにもかかわらず、パフォーマンスは見事であり、それなりに学生の人気を集めていました。

教育研究所所長の平沢先生からのご依頼は、「文教大学の授業」という格式の高いものでした。しかし、経営難とアメリカニズムに基づく「大学改革」という「空気」のなかで「消え去るべき」怠慢な教員にできることは、「古き良き時代」からの懐古趣味的な戯言しかありませんでした。まことに申し訳ありません。